

な た で ら し ょ う ろ う
那 谷 寺 鐘 楼

種 別	重要文化財 建造物
指定年月日	昭和 25 年 8 月 29 日
所 在 地	那谷町 (那谷寺)

鐘楼は、護摩堂の北側の、那谷寺西側の山腹に位置する。唐様建築を基調とする那谷寺の建築物の中で、唯一の純粋な和様建築である。

石積みの基礎の上に、板で袴腰と呼ばれる台座を造り、その上に石の台輪、さらに建築物本体が重ねられる。こういった手法は日本建築史上極めて珍しいものである。

10本の柱は円柱形で、柱の間の壁面には連子窓^{れんじまど}を配し、内部の目隠しをしながらも鐘の音を遮らないよう工夫がなされている。また屋根は入母屋屋根^{ひわだぶき}で、檜皮葺である。

中の梵鐘は、総高 130 センチメートル、口径 77 センチメートルが測る。陽鑄^{ようちゆう}⁽²⁾により、鐘中央部の池の間には唐獅子牡丹図が、鐘下部の草の間には天女図が描かれる。また草の間には元禄 13 年 (1700) に大聖寺藩主前田利直の命で刻まれた銘がある。

(1) 連子窓：縦または横に細長い木材を連続してはめ込んだ窓のこと。

(2) 陽鑄：文様が浮き上がるように表現して鑄造すること

